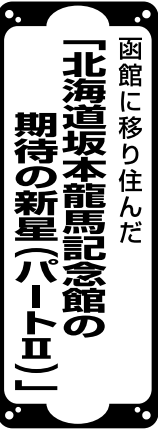


## 移住サポートセンターより

函館に移住された方をご紹介します。



函館に移り住んだ

### 北海道坂本龍馬記念館の期待の新星(パートII)

「H」

#### ■龍馬一族と北海道

「坂本龍馬って、北海道に来たんですか？」

記念館で受ける、最も多い質問だ。

結論を言えば、龍馬は北海道に來ていない。では、なぜ北海道に龍馬記念館なのか？

たしかに龍馬は北海道に來られなかったが、龍馬一族として見てみると、北海道とのつながりは極めて強い。龍馬が暗殺され、蝦夷地への夢が絶たれてしまった後、その遺志は子孫に受け継がれることになったからだ。

まず龍馬の甥にあたる高松太郎が、龍馬の死から6か月後に、明治新政府の役人として函館に渡っている。そして彼は、龍馬の蝦夷地開拓計画を新政府に提言する。その計画はやがて、屯田兵制度として採り入れられていく。

またもう一人の甥、坂本直寛は、明治31年に一族を引き連れて、北海道に開拓民として入植している。自由民

権運動にも加わっていた彼は、龍馬の夢を追って、北海道の開拓に乗り出したのだ。

こうして、龍馬一族と北海道のつながりは、深いものになっていく。そして今も、坂本家の本家は札幌に存在する。

#### ■蝦夷地に懸けた夢

では、これが北海道に坂本龍馬記念館を建てた理由かというところ、それだけでは足りない。一番の理由は、龍馬が描いていた大きな夢にある。

龍馬が生きた幕末動乱期、たくさんの志士たちが戦いのなかで斃れていった。龍馬はこれ以上、内乱によりたくさんの血を流すことで、国を疲弊させてはいけない、と常に考えていた。日本を狙う外国の思いつぼにならしてしまふからだ。

そこで龍馬は、蝦夷地開拓計画を思いつく。争い合う志士たちの目を蝦夷地に向けさせ、その開拓とともに北の脅威(ロシア)からの防衛にあたらせようとしたのだ。

この計画を、龍馬は一貫として持ち続け、その実現に向けて奔走していた。いろいろな資料を検証し、当時の状況から推測すると、彼が蝦夷への渡航を実行に移そうとしたのは、実に5回に上るとみられる。その間、様々な事件や事故、トラブルに巻き込まれながら、彼の想いが揺らぐことはなかった。

そして龍馬は、蝦夷地の先に世界を見ていた。彼が組織した海援隊で、世界に打って出る気概も持っていたのだ。外国との交易によって利潤を得、それを国防に注ぎ込むことまで考えていた。

「役人は、性に合わない。世界の海援隊でも、やろうかのう。」西郷隆盛に問われたとき、龍馬が答えた言葉に彼の想いが込められている。

無駄な血を流すことなく、開拓と防衛に力を注ぐ。これは、倒幕の志士たちはもちろんのこと、函館の英雄・土方歳三を含む幕府側の武士たちさえも救おうという、大きなものだった。

#### ■想いを受け継ぐ

国力を高めながら、外国から日本を守るうという、この計画こそが龍馬のまさに真骨頂といえるだろう。

だが龍馬は、戦いを回避さえすればよい、と考えていたわけではない。出来得る限りの行動をして、それでもどうにもならない時には、力を行使せざるを得ないことも覚悟していた。大政奉還の直前、後藤象一郎に宛てた檄文に、それが表れている。

『大政奉還が成功しないときは、海援隊を率い、慶喜を討ち取る覚悟です。その時は、地下でお会い致しますよ。』命を懸けた、ギリギリの行動を重ねていたことが窺える。そうさせたのは、何としてもこの日本を守りたい、守るのだ」という強い願い・信念が龍馬

に流れていたからに他ならない、と思う。

たればの話になってしまふが、もし彼が暗殺されていなかったら、多くの志士たちと共に、必ず北海道に渡っていたはずだ。そして、最初に足を踏み入れた土地は、開港に沸くこの函館であったことは、まず間違いない。

龍馬がもっていた、これほどまでの計画、これほどまでに強い意志を多くの人たち、特に北海道の、そして函館の人たちに知ってもらいたい。北海道坂本龍馬記念館は、そんな想いの上にある。



龍馬像の前で五稜郭祭出陣式～学生たちと、筆者。(前列右側)

毎年11月、記念館では坂本龍馬蝦夷地上陸祈念祭を行ない、彼が果たせなかった蝦夷地に懸けた夢を、心から祈っている。彼の願いが、今の北海道に、そして日本に届くように。

柳田 善徳